

ア
ウ
ト
リ
チ

通信



第13号
2009年3月20日発行
年3回発行
神戸女学院大学音楽学部
アウトリーチ・センター
〒662-8505
西宮市岡田山4-1
電話・FAX：0798-51-8584

子どものための
コンサート・シリーズ

第二十二・二十三回

スペシャル・コンサート



十一月二十二日(土) 神戸新聞松方
ホール、十一月二十四日(月) 東京文
化会館小ホールにて「子どものための
スペシャル・コンサート」すでにきだね、

日本語の歌！〜(「子どものためのコ
ンサート・シリーズ」第二十二・二十三
回)を開催しました(十五時開演、来
場者数・神戸／三百五十二名、東京／
三百二十八名。出演者にソプラノの釜
洞祐子氏(本学音楽学部九十七回生)
とピアニストの松川儒氏をお迎えし
て、日本語の歌のおもしろさと美しさ
を子どもたちにたつぷりと味わって
もらいました(企画・司会／津上智美)。



コンサートは中田喜直《ちいさい秋
みつけた》で始まり、岡野貞一《紅葉》、
文部省唱歌《虫の声》と《村祭》、山
田耕筈《赤とんぼ》の四曲を秋の歌メ
ドレーで演奏。日本語の特徴的なリズ
ム「びよんこ節」(あーめあーめふー
れふーれと付点リズムになる)を紹介
して中山晋平《鞠と殿さま》。続いて
ユーモラスな歌として團伊玖磨《やぎ
さんゆうびん》と山田耕筈《あわて床
屋》。小さいのに大きい歌として團伊
玖磨《ぞうさん》と文部省唱歌の《う
み》と《富士山》。英語の歌詞と日本
語の歌詞との聴き比べでH・ワーク
《大きな古時計》。そしてコロラトウ
ーラの妙技を味わう《箱根八里》(山
田耕筈編曲)とアリアビエフ《うぐい
す》で前半を締めくくりました。
休憩をはさんで、後半はまず「子ど
もの詩コンクール新曲発表」(後述)。
続いて、子ども時代の作詞による猪本

隆《笑ってもさびしくても》(吉松奈
保子作詞、当時小学校五年生)と山本
正美《ねむの木の子守歌》(美智子皇
后陛下御作詞、高校生時代の御作)。
語るような歌として大中恩《サツチャ
ん》と猪本隆《わかれ道》。現代の歌
から、増本伎共子《土筆の僧正》と《ズ
イズイズコロ橋》、木下牧子《さび
しいカシの木》、そして武満徹《小
さな空》が歌われました。アンコールは
宇野誠一郎《アイ
アイ》と久石讓
《さんぽ》。途中、
お客様全員参加
で「ズイズイズ
コロ橋」をしたり、
一緒に歌って頂
いたりしました。



神戸公演では、四月に開催した「子
どもの詩コンクール」の上位入選作五
作が、詩の朗読と新曲初演という形で

披露されました。まず、佳作および松

岡享子審査員特別賞の福井悠人さん（姫路市立津田小学校二年生）「ゆめちゃんだいすき」、佳作および東直子審査員特別賞の露木堅太さん（西宮市立瓦林小学校三年生）「しずおかのはあちゃん」がご本人によって朗読されました。続いて、中学生の部優秀賞の稲田つばささん（西宮市立平木中学校二年生）《旅立ち》（作曲・ピアノ・石黒晶、独唱・斎藤言子）、高校生の部優秀賞の若山沙織さん（神戸女学院高等学部三年生）《あなたの優しい涙と微笑み》（作曲・ピアノ・中村健、独唱・斎藤言子）、小学生の部優秀賞および特賞の阪本歩美さん（西宮市立瓦林小学校三年生）《わたしのなまえ》（作曲・ピアノ・



澤内崇、独唱・釜洞祐子）が初演され、演奏後には作者から作詞者に楽譜が手渡されました。



ではリラックスしてよい声を出す練習をし、「お気に入りの詩をみつけよう！」ではパネル展示した詩から好きな言葉を選んでしおりに書き抜き、「言葉であそぼう！」では「ズイズイツコロ橋」をしたり「野菜の気持ち」で遊んだりしました。初めての試みで思いがけないことも色々ありましたが、学生にとっては子どもの目線に立つことの大切さを学び、改めて言葉と音楽に向き合う経験になったようです。来場者アンケートでは《箱根八里》《うぐいす》の高音にふるえました「今まで見過ごしていた日本語の美しさ、楽しさを再発見した一時でした。美しい歌声、力強さに感動しました。ピアノの伴奏もすばらしかった」といった声が多く、演奏者の力量が圧倒的だったことがよく伝わってきます。また、「いろいろな企画案に思いがこめられているのを感じ、とてもいいと思

った」「ズイズイツコロ橋がおもしろかった」といったうれしい感想も頂きました。

「子どもの詩コンクール新曲発表」については、「阪本さん作詞の曲が音楽の教科書に載ってますます広まって色々な人が歌えるようになるといいな」との声もあり、関係者一同喜んでいました。

初めての試みで、文字通り試行錯誤だった開演前ワークショップについても、「学生さんたちがいろいろ工夫していて楽しめた」「いろいろな詩を母とゆつくり読むことができた」「どこで何をやっているのかがちよつとわかりにくかった」といったお声を頂きました。

神戸公演では、神戸新聞社ならびに神戸新聞文化財団の共催を得て、広報やホール利用などで全面的な協力を頂きました。シリーズ初の東京公演では、東京音楽大学アクト・プロジェクト、クラファンタジー（神戸女学院大学音楽学部同窓会）、東京支部、めぐみ会東京支部の協力を頂き、「子どもの詩コンクール」審査委員の東直子氏、同審査委員長の松岡享子氏、作曲者の増本伎共子氏も来場下さいました。ここに記して感謝いたします。（津上智実・記）

第二十四回

クリスマス・コンサート

十二月十三日



（土）、本学講堂にて「子どものためのクリスマス・コンサート」みんなで歌おう♪クリスマス・ソング！」（子ども

のためのコンサート・シリーズ」第二十四回）を開催しました（第一部十一時間演、第二部十六時間演、来場者数・四百七十六名/二百七十七名、計七百五十三名）。出演は三月に卒業したばかりの既修生七名と賛助出演の大学院生一名です（ピアノ・今中ゆり、井上香菜、中須賀真弓、杉原真弓、山本佳苗、声楽・松本真奈、奥田敏子、ヴァイオリン・喜多ちひろ）。

前半はクラシック中心の選曲で、ピアノ連弾によるバッハ《主よ人の望みの喜びよ》とブラームス《ハンガリー舞曲 第五番》、独唱でプッチーニの歌劇《ジャンニ・スキッキ》より《私のいとしいお父さん》と続きます。

次はヴァイオリンの登場ですが、まづ音だけが舞台裏から響いてきます。



「何の楽器かわかるかな？」という司会者の問いに、早くも子どもたちから正解の声が上がり、舞台袖から楽器が姿を現すにつれて、会場の声も大きくなります。ここでクライスラー《愛の喜び》と《愛の悲しみ》をヴァイオリン独奏で聴いてもらいました。

続いて、二重唱の楽しさを味わってもらうためにフンパーディングの歌劇《ヘンゼルとグレーテル》より《私と踊りましょう》。小学校の教科書にも載っているお馴染みの曲です。ヘンゼル役とグレーテル役の二人が「足踏みとんとんとん、手拍子とんとんとん、あっち向いて、こっち向いて、クルツと回って……」と踊りながら歌います。この二人のやりとりから、クリスマス由来の意味の話になり、「イエス・キリストの誕生日のお祝い」として、みんなで一緒に踊りましょうと提案しました。「みんなは会場が狭いから回れないよ！もつと簡単な踊りにして！」という声で、お隣さんをとん

とんとんと叩くことになりました。会場の子どもたちも立ち上がって参加しますが、途中で速くなったり、ちょっと違う振りを入れたりして飽きさせない工夫が凝らされていました。



後半はクリスマス・メドレーです。

讚美歌《ひいらぎかざろう》と《ジングル・ベル》をみんなで歌い、《神の御子は》を二重唱で聴いてもらった後、《サンタが町にやってくる》で「あなたからメリー・クリスマス！」と「わたしからメリー・クリスマス！」を客席と歌い交わし、《もみの木》で厳かに締めくくりました。

最後に、もう一つの聴衆参加として《きよしこのよる》を会場の皆さんと二部合唱することを試みました。違うメロディを重ねることの楽しさを味

わってもらいたいと考えて、(一)舞台の二重唱を聴いてもらう、(二)主旋律を歌ってもらう、(三)下のパートを練習して、二部合唱に挑戦してもらう、という手順で進めました。



アンコールの《世界中で一番素敵なお誕生日》では、ヴァイオリンが客席の間を練り歩いて演奏し、最後に出演者を紹介して閉幕となりました。

今回のコンサートは、前日のゲネプロもスムーズにゆき、私たち出演者一同、安心して本番に臨むことができました。本番前には津上智実教授を始め、斉藤言子教授や中村健教授からもア

ドバイスを頂くことができたので、さらによい演奏ができたと思います。

第一部では小さい子が歩き回ってしまう場面もありましたが、子ども達が楽しんで参加してくれたのが何よりでした。会場アンケートでは「きよしこのよる」の二重唱は少し難しかった」という意見もあり、もう少し短くやさしくするべきだったかもしれません。反面、「楽しめた」という意見もあり、全てのお客様を満足させることの難しさを改めて感じました。

第二部では、歌声も大きく、多くのお客様が参加してくれていることが実感できてうれしかったです。子ども達も聴くところは静かに聴き、参加するところははっきり参加してくれて、やりがいを感じました。歌はみんなが楽しめるものと再認識できました。



子ども達の「楽しかった！」という感想を聞く度に、とてもうれしく感じます。出演者はもちろんのこと、臨機応変に動いてくれた

多くのスタッフの力があってこそで、まさに皆の力で作り上げたコンサートでした。(今中ゆり・記)

三大学交流会

「音楽の新しい学び」フォーラム 社会に飛び出す音大生たち

十一月二十三日（日）、十四〜十八時、東京音楽大学（東京都豊島区南池袋三・四・五）にて『音楽の新しい学び』フォーラム 社会に飛び出す音大生たち」を開催しました。

これは、文部科学省大学教育支援プログラム（GP）に選定されている音楽系三大学の共同企画によるもので、神戸女学院大学「音楽によるアウトリーチ」（特色GP）、昭和音楽大学「アート・イン・コミュニティ」（現代GPの地域貢献型）、東京音楽大学「アクト・プロジェクト」（現代GPのキャリア教育型）の三つが、いずれも音楽と社会との関連性を重視した教育プログラムを展開していることに端を発したものです。本学からは、四年生のアウトリーチ履修生七名とアウトリーチ・センターのスタッフ五名、教員二名と事務方一名の計十五名が参加しました。

会場校の東京音楽大学および文部科学省からの挨拶の後、まず三つの大学の学生たちがパワーポイントを使って、自分たちの活動内容について十五分ずつ発表しました。テーマに共通

性があるとはいえ、各校の取組はさまざま

で、履修している学年も力点の置き方や指導体制もそれぞれに異なっており、なるほどこういうやり方もあるのかと思

うことしばしばでした。本学からは友田麻依加さんと大澤侑子さんの二人が代表で発表をしましたが、学校の規模が小さいこともあって、履修生全員が各々リーダーシップを発揮しながら独自の活動を行なっている様子がよく伝わってきました。



次々に見えて、学生たちに質問をしたり声を掛けたりして下さいました。本学のブースでは、学生たちが工夫を凝らして準備した「七タコンサート」「幼稚園コンサート」「病院コンサート」



次は、ロビーでのポスター・セッションです。各大学がポスターやパネル、映像資料などを用意したブースに、フォーラム参加のお客様が

のアルバム等を使って質問にお答えし、とても賑やかな一時になりました。



東京音楽大学の学生十一名によるブラス・ファンファレを合図に、パネル・ディスプレイ「音楽・ひと・コミュニティ」に移り、ピアニスト仲道郁代氏、社団法人日本オーケストラ連盟元事務局長（現在はNHK交響楽団演奏製作部副部長）出口修平氏、東京音楽大学武石みどり准教授、昭和音楽大学武濤京子准教授と赤木舞ディレクター、本学津上智美教授の六人のパネリストによるディスカッションが行なわれました。こうした教育プログラムが学生や地域に何をもたらしたのか、また今後の可能性や課題について議論されましたが、中でも仲道郁代氏の「アートもカルチャー・インダストリーにならないといけない」と



いう力強い主張に会場から拍手が沸き起ったのが印象的でした。フロアからの質問も活発に出されて、このような取組に対する関心の高さを感ぜました。

最後は、東京音楽大学創立百周年記念館の食堂での立食パーティーとなり、サンドイッチとジュースを片手に、各校の学生と関係者はもとより、業界関係者など一般のお客様も入り乱れての活発な交流の場となりました（当日の参加者は三大学関係者七十九名、来賓四名、一般六十五名の計百四十八名でした）。そして本学澤内崇教授の挨拶でお開きとなりました。最後になりましたが、フォーラム開催に当たり、事務局として準備に手を尽くして下さいました昭和音楽大学の皆様、会場校としてきめ細やかなお世話を下さいました東京音楽大学の皆様に御礼申し上げます。

（南香代子・記）



アウトリーチ実習報告

高羽幼稚園



十月三十一日(金)、高羽幼稚園(神戸市灘区八幡町一・八・十九)にて年長児(約九十名)と保護者を対象とした親子学級コンサート(六十分)に出演しました(フルート・能登由衣子、声楽・白川友紀子、ピアノ・大澤侑子、橋本美奈子)。

今回のテーマは「色々な楽器の音色を楽しもう」。まずピアノ連弾でチャイコフスキー《くるみ割り人形》より《序曲》と《トレパック》、フルート独奏でメンデルスゾーン《歌の翼》、ソプラノ独唱でシューマン《献呈》、と各楽器の音色を披露し、次に出演者

全員のアンサンブルでシューベルト《アヴェ・マリア》を演奏しました。

次は子どもたちの出番です。久石譲《さんぼ》と、普段から練習に取り組んでいるというベートーヴェン《交響曲第九番》の第四楽章より《歓喜の歌》です。ここでは発音を確認した後、ピアノとヴァイオリン(副専攻の橋本美奈子)の伴奏で歌ってもらいました。

ピアノ連弾で中田喜直《初秋から秋へ》を演奏した後、保護者からの歌のプレゼントとして小林秀雄《真赤な秋》と岡野貞一《紅葉》が歌われ、子どもたちは久石譲《崖の上のポニョ》を振り付きで歌ってお返しします。

続いてデザイン・メドレーをピアノ連弾で演奏。知っている曲はみんなも一緒に口ずさんでくれました。最後に《幸せなら手をたたこう》で手拍子をして元気に締めくくりました。

今回は一時間と時間が長く、また園側からの要望も複数あつて、それらを織り込むのに苦労しました。当日は、園児たちが一緒に歌ってくれたり、楽しそうに参加してくれたのがうれしかったです。子どもたちとのコミュニケーションの取り方や話し方など、学んだこともたくさんありました。

(大澤侑子・記)

雲雀丘学園小学校



十二月十六日(火)、雲雀丘学園小学校(宝塚市雲雀丘四・二・一)の音楽室で、五年生四クラス(各四十五分)を対象とする実習を行いました(声楽・金岡怜奈、先間恵子、ピアノ・友田麻依加)。同校音楽教諭の岡村圭一郎先生(バリトン、関西二期会会員)にも加わって頂きました。

今回は「歌やオペラの魅力を感じてもらおうこと」をめざして、最初にヘンドルの歌劇《セルセ》より《懐かしい木

陰よ》とベネディクト《みそさぎい》を歌いました。次に、モーツァルトの歌劇《フィガロの結婚》について、粗筋の説明は最小限にとどめ、今回取り上げるアリアを歌う登場人物の性格をわかりやすく写真とともに紹介しました。ケルビーノのアリア《恋とはどんなものかしら》を歌った後、岡村先生にフィガロのアリア《もう飛ぶまいぞ、この蝶々》と伯爵のアリア《もう訴訟に勝つただと!》を歌って頂きました。最後に、《赤鼻のトナカイ》《シングル・ベル》《あわてんぼうのサンタクロース》といったクリスマス・ソングを子どもたちと一緒に歌いました。

実習に行くまでは「五年生」と一括りで考えていましたが、実際に行ってみるとクラスによって様子が全く異なるのに驚きました。四クラスで四回同じプログラムを実施したことで、少しずつ生徒達の反応を見ながら進められるようになりました。岡村先生が同じアリアをイタリア語でも日本語でも自在に歌われるのを見て、レパートリーの増やし方についても考えさせられました。先生には授業中何度もフォローして頂きました。このような学びの機会を与えて下さったことに感謝します。

(金岡怜奈・記)



侍女スザンナが小姓ケルビーノを逃がそうとする小二重唱と、伯爵夫人とスザンナが歌う〈手紙の二重唱〉を演奏しました。

ここで、会場の皆さんにも参加してもらって、上真行《一月一日》、文部省唱歌の《富士の山》と《雪》、渡辺茂《たきび》を一緒に歌いました。

最後に、各人がソロで演奏しました。ピアノ独奏でシヨパン《練習曲 作品二十五・一 エオリアン・ハーブ》、ソプラノ独唱でハーン《あなたに忠実でありたい》、山田耕筰《からたちの花》、プッチーニの歌劇《ジャンニ・スキッキ》より〈私のいとしいお父さん〉。曲に対する思いなどもお話ししました。

日本の歌は会場の皆さんが大きな声で歌って下さいましたし、私たちの話も熱心に聴いて下さいました。目が合うと、皆さんにっこりして下さい、終始温かく穏やかな雰囲気の中で演奏することができました。

後には、直接声をかけて下さる方もあり、お客様とのこの距離の近さはアウトリーチならではのと思いました。



(友田麻衣加・記)



一月三十一日(土)、西宮市立大社小学校(西宮市桜谷町九・七)にて、若松町自治体青少年部主催のコンサートに出演しました(フルート・中村亜彌子、クラリネット・田中富規子、ピアノ・井上智恵子、藤井麻由、南方今日子)。

コンサートは小学生六名と保護者対象で七十五分。二つの木管楽器、クラリネットとフルートに親しんでもらうことを目的としました。

まず、クラリネットとフルートの二重奏でエルガー《愛のあいさつ》。フルートの楽器紹介をした上で、ビゼー《アールの女》より《メヌエツト》と、イサン・ユン《雅楽》を独奏し、音色を披露しました。イサン・ユンの作品に使われている特殊奏法には子どもたちもびっくり。さらに、ピッコロ、アルト・フルート、バス・フルートの音高や音色を比較しました。

次に、クラリネットの紹介です。《ク

ラリネット・ホルカ》などで音色を知ってもらった後、ソプラノ、バスなど様々な種類のクラリネットとその違いを聴き比べてもらいました。リードの説明をした時には、子どもたちは身を乗り出して話を聞いてくれました。フルートもクラリネットも長さによって音域が変わることを理解してくれた様です。

最後に、出演者五人でリコーダー合奏をしました。リコーダーは小学生にも身近な楽器です。ソプラノ、アルト、テナーの三種を使って、ヘンデル《水上の音楽》などを演奏しました。

子どもたちの反応はともストレートで、質問すると、みんなすぐ手を挙げて答えてくれました。特に、特殊楽器への反応がよく、ピッコロやバス・クラリネットの時に子どもたちの表情がキラキラしていました。

演奏者には教員志望者が多く、子ども達の顔をじっくり見ながら臨機応変に演奏や話ができました。今回学んだことに、事前準備の仕方があります。質問して答えがどう返ってくるか三パターンぐらい用意していましたが、最初に答えが出た時を想定しておらず、リハーサルで指摘されて対応の準備をしました。コンサートでは本当に最初に正解が返ってきてびっくりすると同時に、準備しておいてよかったと思えました。

(中村亜彌子・記)



二月四日

(水)、独立行政法人国立病院機構兵庫中央病院(三田市大原一三二四)にて、入院患者の方対象のコンサート(四十分)

に出演しました(フルート・中村亜彌子、能登由衣子、寺田朋加、ピアノ・藤井麻由)。

ここでは、フルートの美しい音色のアンサンブルで心も体もわくわくするプログラムを目指しました。

まず、フルート三重奏でカステレード《フルート吹きの休日》とクラウド《フルート・トリオ作品十三》、次にフルート二重奏で七瀬あやこ編曲《ウィンター・ワンダーランド》とドップラー《アンダンテとロンド》、そしてフルート独奏でミュージカル《マイ・フェア・レディ》より《踊り明かそう》など、色々な組み合わせでフルート演奏の可能性を披露しました。その合間に唱歌や童謡を入れて、患者の皆様にも歌で参加して頂きました。《大きな栗の木の下で》では、体を動かす場面も取

り入れ、栗の大きさを指、手の平、腕で表しました。

三重奏がメインでしたが、単調にならないよう、めりはりのある選曲を心掛けました。耳馴染みのない作品もありましたが、演奏が始まると皆様、真剣に聴いて下さって、予想以上の拍手と反応を頂きました。

メンバーはそれぞれに意識が高く、演奏やお話のほか、会場を歩き回って一緒に歌ったり、演奏する姿を間近に見てもらおうよう工夫したりと、聴衆に一步踏み込んだ演奏をすることができました。このメンバーで活動する機会は今後も改められていくことができたので、今後さらにより関係を作ることができそうです。

(中村亜彌子・記)

刀根山病院

三月二十六日(木)、独立行政法人国立病院機構刀根山病院(豊中市刀根山五・一・一)の院内コンサート(六十分)に出演しました。(声楽・金岡怜奈、藤田理世、先間恵子、フルート・中村亜彌子、ピアノ・大澤侑子、友田麻衣加)。

会場は患者さんたちがリハビリで頑張っておられる作業療法棟フロア

です。窓の黒いカーテンを引いて用意してきた黄色の月と星を飾り付けて舞台を演出、夜とファンタジーの世界へと誘います。



コンサートはロッシニ《猫の二重唱》ではじまり、お話を交えながらミュージカル《キヤッツ》より《メモリー》を三重唱で、シュー

マン《子供の情景》より《トロイメライ》をピアノ独奏で、チャイコフスキーの組曲《くるみ割り人形》より《行進曲》と《金平糖の踊り》を連弾で演奏。日本歌曲《からたちの花》で、不思議な音楽の世界から懐かしい日本の風景へと進みます。会場の皆さんと体操や深呼吸で体をほぐした後、日本の歌メドレー《富士山》《たき火》などを一緒に歌いました。コンサートの後半はオペラで、ヘンデルの歌劇《セウルセ》より《懐かしい木陰よ》、モーツァルトの歌劇《フィガロの結婚》より《手紙の二重唱》、プッチーニの歌劇《ジャンニ・スキッキ》より《私のいとしいお父さん》をそれぞれ独唱で聴いて頂きました。続いて、ドビュッシー《ベルガマスク組曲》より《月の

光》をピアノ独奏で、エルガー《愛のあいさつ》をフルート独奏で演奏しました。最後に皆さんと一緒に《翼をください》《上を向いて歩こう》を歌ってコンサートを終わりました。

刀根山病院は末期癌の患者さんが集まるターミナル・ケアの専門病院で、コンサート一週間前に病院の先生やスタッフの方たちから患者さんの様子やサポート体制についてお話を伺いました。入院生活を送っている患者さんが私たちと一緒に楽しい一時を過ごしていただけのように「ファンタジー」をキーワードにプログラムを考えました。今回のコンサートは今年度最後の実習で、それぞれが今までのアウトリーチで経験したことを活かすことが出来たと思います。コンサートが始まってからも、たくさんのお客さんが来てくださって、日本の歌メドレーや《翼をください》と一緒に大きな声で歌って下さり、私たちも皆さんからの暖かい気持ちを感じながら演奏することができました。終演後には、患者さんから直接一人一人に花束を手渡して頂き感激しました。

(金岡、先間、友田・記)

ゲスト・ティーチャー

松原美保先生

十二月十二日、一月九日の二日間、三年生の「音楽によるアウトリーチ（講義）」に松原美保先生（宝塚市立すみれが丘小学校音楽教諭）をゲスト・ティーチャーにお迎えして授業をして頂きました。

一日目は、私達学生七名が小学校五年生を対象としたプログラム案を発表。指揮の楽しさや音楽を組み立てる難しさを伝えようとテーマを絞って考えたのですが、取り上げる曲の難易度の問題や、プログラムを進める上でのポイントといった点で助言を頂き、知識経験共に浅い私達にはよい勉強になりました。体を使ったリズムのゲームもいくつか教えて頂き、子どもの集中力を維持する工夫が必要であることにも気付かされました。

授業二日目は、小学校の音楽教科書（教育芸術社）の主な鑑賞教材を活用して、小学生対象の二十〜四十五分のプログラム案をグループで相談して発表しました。即席のグループで、相談する時間が約三十分と制限された中、実に様々な案が出ました。小学三・四年生を対象に、五年生の鑑賞教

材のサン・サーンズ（動物の謝肉祭）から「白鳥」を題材に、動物を「音」で感じてもらう案を考え、グループや、三年生の鑑賞教材の「ヘンゼルとグレーテル」から「私と踊りましょう」を演奏と朗読で楽しんでもらう案を考えたグループもありました。発表後、他のグループのメンバーが意見を述べ、松原先生からアドバイスを頂きました。授業の最後に先生が提案するプログラムの一部を実際に体験しました。「短い曲を選ぶこと」と「構成の似ている曲を集めること」で、子どもたちが集中力を切らさずに楽しめることを教えて頂きました。松原先生の「教えて印象に残ったのは「子どもに隙を与えないこと」です。現役の先生からの貴重な助言を、これからの活動に活かしていきたいです。

（南里沙、須山由梨・記）

新旧履修生交流会

二月二十一日（土）神戸女学院大学エミリー・ブラウン記念館のめじらウインジにて、アウトリーチ新旧履修生交流会を行いました。これは「音楽によるアウトリーチ」を履修した卒業生と在学生の交流を目的としたもので、初

回の今回は一期生から八期生までの計十八名が参加しました。アドヴァイザーとして音楽の西明美教授、作曲の澤内崇教授、ピアノの田中修二教授に加わって頂き、アウトリーチ・センターからはスタッフ三名（井本彩子、三上昌子、中村公美）とセンター長の津上智実教授が出席しました。

十時に学部長の西先生の挨拶で始まり、一期生から順に自己紹介と活動報告を行いました。学年でグループを作って定期的に活動している人もあれば、音楽教室で教えたりオーケストラで弾いたりメインで、アウトリーチ活動はあまりしていないという人もあって、様々です。授業立ち上げ時の一期生たちと、アウトリーチ・センター設立後の学年とでは経験や苦労が大きく違っていることも改めて感じました。ホームページを活用して順調に活躍の場を広げている「アンサンブルちようちよ」の発表は具体的に参考になるものでしたし、フェア・トレードの支援団体と提携することで、自分たちの音楽活動を海外の地域支援に結びつけているグループがあるのには心を打たれました。

アドヴァイザーの先生方からは、「聞きやすい曲や有名な曲よりも、自分が自信を持って弾ける曲を弾く方が、気迫が伝わって結局聞いてもらえ

る」「プロとして演奏するということでは、人々の心に残るような演奏をすることであり、演奏家として成長し続けなくてはいけない」「今後、地方を回ってはどうか。昔は地元の教会や卒業生のコミュニティを頼つての演奏キヤラバンというものがあつた。そのような試みがあつても面白いかもしれない」といった助言を頂きました。



参加した卒業生からは「他の学年の活動の様子を知ることができて刺激になった」「また開催してほしい」、在学生からは「卒業してからどのように音楽活動を続けていけばよいのかわからなかったので参考になった」「学生の中から準備していた方がよいことが分かった」といった意見が出て、開催できてよかったと思われました。

（南香代子・記）

アウトリーチ海外通信

アメリカでの

アウトリーチ関連会議に参加して

アウトリーチ・センタースタッフ
寺澤 彩

一月十四日、十五日の両日、アメリカのニューヨークで行なわれたアウトリーチ関連の二つの会議に参加しました。ニューヨークのグリニッチ・ウイレッジで行なわれた「音楽キャリア開発オフイサー連絡会ニューヨーク総会 2009 The Network of Music Career Development Officers (NETMCO)」2009 NYC Conference」と、マンハッタン音楽院で行われた「音楽院と音楽大学における教育アウトリーチ協会 第三回年次総会 Consortium for Educational Outreach at Conservatories and Schools of Music (GEOSM) Conference」です。

まず、NETMCOにこころ。十四日は本会議の二日目にあたる日で、前日に引き続きの内容で開催されました。参加校は三十三大学。各校の担当者が集まり、様々な討論を行いました。

午前中は、①学生へのサポート内容や新しいメディアへの意識改革などを通して、どのようにアウトリーチ教育の可

能性を広げていくのか、②コミュニティ(聴衆)との関係構築について、実際のアウトリーチ活動例を交えての二点に分けて、パネル・ディスカッションが行なわれました。それぞれオランダやイギリスからのパネリストが参加。アメリカだけでなく、ヨーロッパの現状や具体的なプログラム内容についての発表や意見交換も行なわれました。

また午後には、分科会形式でセッションが行なわれました。それぞれの議題はその場での自由な提案により決定。おもしろい方法だと思いました。私が参加したセッションは「活動資金について」と「聴衆とどのように engagement するか」についてです。聴衆とコミットするための様々なアイデアや提言、音楽プログラムを構成する際の指導ポイントなどについて意見交換したり、実際行なっているプログラム案についてお互いの例を発表し合うなどしました。

最後は今回の会議で感じたこと、今後の課題等について全員が一言ずつ話して会議を締めくくりました。

この会議では、オランダの大学でアウトリーチ活動の研究をされている先生やダンス専攻の学生さんとアウトリーチされている先生とよくお話することができました。オランダの先生は、ヨーロッパでどのようにアウトリーチ活動が普及しているかなど調査されていて、今はオランダ国内の大学だけで

なく、イギリスのギルドホール音楽院と提携して活動を推進されているそうです。またダンスの先生は、公演の際、聴衆との距離を縮めるために、生徒が公演前に子どもたちに話にいったり出迎えたりしているというお話を伺いました。十五日はGEOSMへ。これは二〇〇六年六月にニューヨークとボストンのアウトリーチ担当者らが交流の場を持ったのをきっかけに始まったもので、第三回目の今回はマンハッタン音楽院が主催校となつて行なわれました。参加校は十五大学。今年はイギリス (Royal College of Music) からも参加がありました。

午前中は、各校の取り組みや組織等、カリキュラム内容についてそれぞれ発表していきました。ジュリアード音楽院では、音楽、演劇、ダンスの全専攻生がコラボレーションしたアウトリーチ活動に取り組んでいたり、NYC School of Arts では州全体を演奏旅行したり、と各校様々な活動内容を展開しています。

昼食時には
フリーディス
カッションの
時間がとられ、
「財政支援」
「音楽院と地
域文化団体と
の関係構築」
「地域でのア

ウトリーチ・プログラムのカリキュラム



統合」の三点がトピックスとして設けられました。今回は財政支援について、イギリスからきた担当者の方と話しました。Royal College of Music では、イギリスの大きなガス会社から支援してもらったりしているそうで、そのような可能性は日本では考えられないのかという提案がありました。

午後は今後の計画等についての討論です。まず、この会議のネーミングやコンテンツのとり方について話し合いました。その中から、「Outreach」と「Engagement」それぞれの言葉の定義についての問題提起もありました。また「Face Book」というコミュニティサイトを活用することになりました。そこにこの会のページを作成し、様々な情報をアップしていくことになりました。今後この会議の中味をどうしていくかについては、分科会形式を取り入れたり、パネリストを迎えたり、Best Practical Modelを迎えたり、などの提案がありました。

今回の会議では、各校に事前アンケートを実施しており、大学やアウトリーチを担当しているオフィス、財政の規模、また各校のカリキュラム情報や今後の課題が記載されているレジュメが用意されており、大変収穫の多い視察となりました。

グロウプタウン・プロジェクト

アウトリーチ六期生

東 瑛子

英国ギルドホール音楽院は現在、地域・教育機関との連携を通して、様々な音楽プロジェクトを展開し続けています。その取り組みの大きな柱である「コネクト」プロジェクトは、一九八〇年代にアウトリーチ活動の先駆けとして立ち上げられ、その名の示すとおり、それぞれの年代・文化的背景を問わず、共に音楽を創り出し共有することに よって、人と人とのつながりを強め、音楽体験を充実させることを目的としています。

このプロジェクトで、学生は幅広い層の聴衆を想定した企画、パフォーマンス等の実践経験を積むことができます。卒業後の進路の開拓にあたって必要な力を培うことができます。二〇〇八年秋より、私はギルドホール音楽院の修士課程に籍をおき、リーダーシップ専攻生として様々なプロジェクトに参加する機会を得ています。リーダーシップとは聞きなれない専攻名ですが、これは地域・教育現場など、社会のあらゆる場面での創造的な音楽づくり、コラボレーションをリードする人材の

育成を目標とするコースです。専攻生は西洋クラシック音楽に留まらず、民族音楽、即興、ジャズなど、あらゆる音楽からの幅広い音楽的エッセンスの吸収が求められ、実践の場ではそれらのエッセンスを生かしつつ、共演者のアイデアの力強い受け皿、展開者として音楽を創造していくことが課題となります。「コネクト」プロジェクトは、リーダーシップ専攻生（在学生のみならず卒業生も含め）の有効な実践の場としても機能しており、数々のワークショップやパフォーマンスの機会を提供しています。今回はその「コネクト」プロジェクトのうち特に大規模なものの一つ、「グロウプタウン・プロジェクト」について報告します。



撮影：Katie Henfrey

このプロジェクトは、ギルドホール音楽院と提携しているロンドン東部の小学校四校と中学校一校の生徒と、ギルドホール音楽院のリーダーシップ専攻生と教員を基本メンバーとして、毎

年一月中旬から二月中旬にかけて開催されます。一月十四日、全学校の生徒（約二百五十名）とギルドホール側スタッフ（教員二名、学生九名）との初顔合わせを皮切りに、最終日二月十二日の演奏会に向けて、五週間にわたるプロジェクトがスタートしました。

なお、今年はグロウプタウン・プロジェクトが発足して十年目の節目の年にあたり、それを記念してこのプロジェクトは、一九六〇年代米国ロックバンドの中心的存在であったビーチボーイズのリーダー、ブライアン・ウィルソンのアルバム名にヒントを得て、「スマイル」と名付けられました。「スマイル」は、プロジェクト全体を貫く共通のコンセプトであると同時に、五つの学校とギルドホール音楽院とのコラボレーションにより完成する一つの作品を表します。

五週間の期間中、ギルドホール音楽院の学生は二つの課題を与えられます。まず週二日、それぞれが担当する小学校に向いて、タイトル「スマイル」を下地に、子どもたちと自由に新しい音楽を創り出し、それをリードすること。二つ目は週一日、中学校で、このプロジェクトのために特別に編成されたオーケストラを指導するこ

と。こちらでは音楽の基本設計はギルドホールの先生方が行い、学生はその骨組みをもとに、子どもたちに演奏可能なリズム、旋律などの音楽要素を探し出して、楽曲の肉づけをすることになります。



撮影：Katie Henfrey

いずれも、それぞれの生徒の楽器演奏の技量や声域をかんがみ、個人と全体に気を配りつつ、必要に応じて音楽の形を変えていけるよう、また、子どもたちのアイデアを幅広く取り入れながら発展させていけるように、柔軟な対応を求められます。では、それぞれの課題の具体的な実践を見てみましょう。

小学校では、まず始めにギルドホール音楽院の学生が四つの小学校それぞれ音楽の出発点となる調性、拍子、和声、全体の構成などの基本要素を設定して演奏し、そこから受ける印象をもとに子どもたちがオリジナルの歌を作り、歌詞や振りを加え、さらにボディアパーカッションなどのアイデアを加えて、それぞれのオリジナル作品を完成させることとなります。

一方中学校では、小学校のオリジナルの四曲を導入するための前奏、各曲間の橋渡しとしての間奏、結びの後の奏、加えて曲にこまごまと登場する即興ソロなど、膨大な音楽的要素を「スマイル」という一曲に集約していくために必要な枠組みを一から定めなければなりません。メンバーが大編成・大人数ということもあつて進行は困難を極め、さらに、期間中ロンドンを見舞った十八年ぶりの大雪によってセッションが数回キャンセルになるなどのハプニングもあり、練習部屋はまさに突貫工事のような様相を呈していました。そのような中、先生方の強力なリーダーシップ、曲中に何か問題が起つても、別の方法を選び取って新しい道筋を示すことのできる音楽的アイデアの豊かさ、今必要なことを的確に抜き出して実践させる手際の良さが、限られた時間を着実に有効なものに変え、音楽を通して実を結んでいくのを、肌身で感じる事ができました。

このようにして事前のセッションの日程を全て終え、二月十二日、演奏会当日を迎えました。朝十時半からギルドホール音楽院の音楽ホールで初めての合同リハーサル・最終通しが行われ、各学校の曲と曲の受け渡し、オ

ーケストラと各小学校との兼ね合い、サウンドのチェックをします。朝から続くリハーサルで子どもたちの中にも疲れが見えましたが、それまでバラバラに機能していた作品が、一曲にまとめられてその色彩豊かな全貌を現し始めると、徐々に子どもたちの表情も熱気を取り戻していききました。



リハーサル風景

そして十二時、満員のお客様を迎えて「スマイル」が開演。前奏に、ハワイの歌「Kuoko, a Mana Walea Kuoko, a Minoaka Minoaka Hana Aloha」(自由、豊かな富と微笑み、微笑みと音楽、そして愛がオーケストラ伴奏で歌われ、四つの小学校のオリジナル・ソングへと連なっていきます。各小学校のパフォーマンズが始まり、子どもたちのソロや即興の度に、歓声や拍手が沸

き起こりました。四つの小学校は、全体に共通する切り口、強力なテーマとしての「スマイル」を踏まえたつづ音楽を創り上げたのですが、各学校の子どもたちの人数、備えている楽器の種類、ソリストとして演奏できる子どももの割合、さらに子どもたちをリードするギルドホールの学生たちが担当の小学校に持ち込んだ音楽要素がそれぞれ全く異なるため、出来上がった音楽もおのずと個性が分かれました。ブラジル出身のリーダーの影響を受けてサンバを基調とした《Let's all smile》、ボーイ・ソプラノの歌声および吹奏楽器のソロと合唱との対比が明確な《Skydiving》、ピアノとハーブの作る和音の上に合唱が繊細に音を並べる《Green Light》、東洋ペントニックとビーチボーイズの作品をアレンジして二部構成にした

《Fracusee》と、五週間の間にそれぞれ全く違う個性を育てた四曲が、間奏を挟んで続いた後、「スマイル」はオーケストラと子どもたちの合唱で締めくくられました。演奏時間はほぼ一時間。音楽ホールの狭い舞台の上で、二百五十人もの出演者は、自分たちの生み出したアイデアを音楽の中に昇華させ、各々の役割をそれぞれの方法

で確実に果たしていました。大きな作品の中で一人ひとりが埋もれることなく、はっきりとした自分の役割を持ち、その役割を舞台という特別な場所で果たした時に感じる喜びを、ある児童が「Miracle!」という言葉を使つて表現していました。この言葉が、このプロジェクトの持つ魅力の一面を端的に捉えていると思うと同時に、その「Miracle!」が力強いリーダーシップ、的確な判断力、あらゆる音楽的アイデアに導かれ生み出される様を間近で見ることができた喜びを、醒めることなく今も強く感じています。



撮影 : Katie Henfrey

*なお、過去のグローブタウン・プロジェクトについては、アウトリーチ通信の第七号(二〇〇七年五月発行)と第十二号(二〇〇八年十一月発行)に津上教授のレポートがあります。

卒業生の活動報告

クロマティカ!

『音楽』による社会貢献を目指して

アウトリーチ四期生
田中 麻衣子

クロマティカ! (Chromatica) は

アウトリーチ四期生の多田安希子(ピ
アノ)と田中麻衣子(打楽器)によっ
て二〇〇六年に結成されたユニット
です。結成のきっかけは、「神戸の冬
を支える会」(阪神淡路大震災後に発
足した野宿者支援のボランティア団
体)主催のチャリティ・コンサートに
出演するためでした。それ以降、阪神
間や和歌山県のカフェやホールで自
主企画の演奏会を開き、少ないながら
も収益をあげてきました。けれども、

毎回その収益は演奏会後の打ち上げ
代に消えてしまい、これではせっかく
頂いたチケット代がもつたない!
もっと生きたお金の使い方をしなけ
れば! と思い、自主企画でもチャリ
ティのコンサートにしようと決意し
ました。

そこで、数あるNGOやボランティア
ア団体の中から、「アジア女性自立支
援プロジェクト(AWEP)」という
団体を選んで演奏会を提案したとこ
ろ、快諾を得ました。この団体はアジ
ア女性の経済的な自立を支援するた
め、生活相談や小規模融資、フェア・
トレード商品(フィリピン、タイ、ネ
パール、韓国などで生産)の販売等の
活動をしているNGOです。

なぜAWEPを選んだかと言えば、
女性として生きていく上で直面する
人生の様々な問題(結婚、出産など)
と演奏活動の継続をどうやって折り
合わせていくかという問題意識を、大
学在学中にアウトリーチの授業で持
ったことが背景にあります。女性の生
き方を考える上で、AWEPの活動は
大変興味深いものです。

演奏会の企画を煮詰めていく中で、
ただ演奏するだけでなく、その合間に
AWEPの商品を販売すれば、お客様
に会の活動やフェア・トレード商品を
知ってもらう機会になるのではない
かと考えて、物品販売もすることに
しました。

アウトリーチで社会貢献をめざすに
当たって、次の三つを心掛けています。

- ・社会のあり方に関心や疑問を持つ
- ・社会的な認知度や地理的な問題で、
支援の行き届いていないところ
に目を向ける
- ・音楽を「恵む」という上からの視線
ではなく、「届ける」という気持ち
を持つ

まだまだ模索中ではありますが、こ
うした方向で活動の幅や音楽の幅を
広げていきたいと思っています。

特色GP総括

特色GPの三年半を振り返って

アウトリーチ・センター長
津上 智実

神戸女学院大学の教育プロジェクト
「音楽によるアウトリーチ」は文部
科学省の平成十七年度「特色ある大学
教育支援プログラム」(特色GP)に
採択され、同年十月から平成二十一年
三月まで、国からの補助金を受けて運
営されてきました。この三年半を振り
返ってみたいと思います。

まず、平成十七年十月一日、音楽学
部内にアウトリーチ・センターを設立
しました。スタッフ常駐(週五日二人
勤務)、派遣二名とアルバイト三名でロ
ーテーション、八名中七名は音楽学部
卒業生)による事務的サポートを得て、
アウトリーチ教育に関わるあらゆる
仕事にスムーズに運ぶようになりま
した。

また、アウトリーチのホームページ
を開設し、さらに『アウトリーチ通信』
を年四回ないし三回(これまでに十三
号)発行して、学生の活動や学びにつ
いての報告を続けてきました。

これらによって社会的認知が得ら
れ、演奏依頼が格段に増えて、学生の
実習の可能性が大きく広がりました。
その結果、プログラムの反復実施が可
能となり、学びの深化と向上が実現で
きたのは一番の成果です。

小学校や病院等で、アウトリーチの
実習先として継続的に呼んで下さる
ところが増えてきたのもありがたい
ことです。会場の様子や受け入れの姿
勢が分かっていると、安心してじっく
りと準備ができますし、学生は先輩た
ちの体験や反省を踏まえて実習内容
を考えることができます。



また、体験用楽器（マリンバ、フルート、分數ヴァイオリン、トーン・チャイム、打楽器等）や関連機器（照明、カメラ、インカム等）の充実によって、プログラム実施やコンサート運営が目に見えて向上しました。楽器のない場へのアウトリーチ用に備えた電子ピアノは予想以上の活躍で、時には一台では足りないほどでした。



実習と並ぶもう一本の大きな柱「子どものためのコンサート・シリーズ」について、まず七夕コンサート（四年生出演）とクリスマス・コンサート（新卒の既修生出演）では、裏方の充実のお蔭で教員が出演者の指導に専念できるようなったのが大きな変化で、あるべき姿がようやく実現できたという思いがあります。

一方、スペシャル・コンサートでは、念願だった弦楽による室内楽（第十八回「五つの弦楽器とピアノのゆかいな音楽会」、九号一〜三頁参照）や、「コントラバスの神様」ゲリー・カー氏のチャイルド・コンサートを日本で初めて実現させる機会にも恵まれました（第二十回「コントラバスの魔術師ゲリー・カー登場！」、十一号一〜二頁参照）。世界的ソプラノ釜洞祐子氏（本学卒業生）に出演願って、本シリーズ初の東京公演を実現することもできました（第二十二・二十三回「すてきだね、日本語の歌！」、本号一〜二頁参照）。その事前企画として「子どもの詩コンクール」を実施したのは、女学院初のコンクールとして大きな試みでした（第十二号五〜六頁参照）。



国内での交流も活発化し、他大学や他団体の取組みに学ぶ機会が飛躍的に増えました。中でも昨年十一月の三大学共催「音楽の新しい学び」フォーラム（於、東京音楽大学）の実施により、学生レベルでの直接的な交流を実現できたのは大きな成果で、学生の意識の変化と成長を如実に感じました（本号四頁参照）。

海外との交流では、ニューヨークで毎年一月に開催される「音楽院ならびに音楽大学における教育アウトリーチ協会」年次総会に、二〇〇七年の創設時から継続して参加している日本で唯一の大学として、大学間の横の連携が日米から日米欧へと次第に広がりがつつあることを実感しています（六号九頁、十号十八頁および本号九頁参照）。近い将来、教育プログラムそのものの交換・交流へと発展する期待しています。

可能性をも内包する優れたもので、その理念とシステムには今後も学んでいきたいと考えています。



2007年11月23日
グレゴリー先生ワークショップ

学生の根本的な学びとして、ピアニスト仲道郁代氏、ヴァイオリニスト五嶋みどり氏にアウトリーチ・アドヴァイザーとして助言頂き、学生たちと直にディスカッションして頂いたのは大きな刺激となりました（四〜六号巻頭記事等参照）。ニューヨークのジュリアード音楽院からエドワード・ビラウス先生（四号五〜六頁参照）、ロンドンのギルドホール音楽院からジョン・グレゴリー先生を招聘し、ワークショップという形でクリエイティブ・ミュージックの新しい教育実践を行ない、その成果を実感しました（十号一〜五頁および十二号四〜五頁参照）。特にギルドホール音楽院の教育プログラムは、地域社会の変革の可能性をも内包する優れたもので、その理念とシステムには今後も学んでいきたいと考えています。

卒業生の中に継続してよい活動をする人が出てきたのはうれしいことです。フルートの絹田朋子さん（一期生）はロンドンで「ライブ・ミュージック・ナウ！」の認定アーティストとして活躍し（三号五〜六頁、五号六〜七頁および十一号四〜五頁参照）、ヴァイオリンの東瑛子さん（六期生）はギルドホール音楽院修士課程でリーダーシップを専門的に学び始めています（本号十〜十一頁参照）。オルガンの早野紗矢香さん（二期生）の着実な歩み（十二号六〜八頁参照）、アメリカ留学を経て「音楽工房」を立ち上げた志伊理絵さん（二期生、七号二〜

三頁参照)、アジアの女性問題を視野に入れた田中麻衣子さん(四期生)たちの活動(本号十二頁参照)、四人グループ「アンサンブルちようちよ」(五期生)の優れた活動(十一号五く六頁参照)なども注目されます。一方、京都や滋賀、三重の文化会館や文化財団に就職した三人(二期および二期生)は、現場のあまりの厳しさに危機感を覚えて、研究や教育、家庭に入るといった進路変更をしました。文化の作り手の側の労働問題も看過できないと感じます。

補助金終了後、新年度からは薄い人手の中での実施を余儀なくされ、厳しい状況での実習実施となりますが、教育プロジェクトとしての理念を揺るがすことなく、あくまで建学の精神に沿った活動として、女学院ならではの丁寧な活動を続けていきたいと願っています。



履修生紹介

「音楽によるアウトリーチ(講義)」を履修した三年生(八期生二十五名)



フルート

門田佳子
木村友香

オーボエ

南里沙

ピアノ

藤原奈保
柏 春加

村田優季
中川由梨恵

野崎早織
小幡文香

大堀沙織
小田迪世

岡崎典子
奥森良美

齊藤瑤子
佐竹恵理

澁谷佳那
須山由梨

立川瑞貴
田中千尋

ヴァイオリン

青田朋子

声楽

藤野 直

樋岡絵里那

井本綾華

石津寛乃

糀谷菜里子

四年生（七期生）
一人ひとりからのメッセージ



藤田理世（声楽）

今年是他大学との交流会などもあり、様々な角度から音楽を考える機会が多く、視野がとて広がったと思います。実際にコンサートをしてみると、自分にこんなところがあったのだと新しく発見することもありました。アウトリーチで学んだことを今後に活かしていこうと思います。



先間恵子（声楽）

アウトリーチでのワークショップや実習を通して、本当に多くのことを学ぶことができました。特に病院やデイケア・センターでの実習は、今後の活動に活かすことができる貴重な経験となりました。



金岡伶奈（声楽）

「音楽によるアウトリーチ」を履修して、実習では音楽と人との関わりの深さを感じました。ワークショップや東京研修では改めて音楽のあり方を学びました。このような経験は自分の演奏を見直すきっかけにもなり、音楽家としてとても充実した一年半でした。



中村亜彌子（フルート）

私は授業を通して、どうしたら聞き手が楽しめる内に、自分自身が楽しんでいくことに気がつきました。音楽をする本当の喜びを学んだ気がします。レッスンはもちろん、就職課程や室内楽、オーケストラも履修していた私にとって、ハードそのものでしたが、最後には自分の芯となるものを頂いたと思っています。



井上智恵子（ピアノ）

グループダイナミックス——一人ではできない、グループだからこそできる、味わえるもの、そしてそこから生まれるパワー——がアウトリーチにはありました。良い面も悪い面もありましたが、みんなでコンサート等を創り上げたときのあの気持ちは音楽に携わる者としてかけがえのない経験になりました。私を支えてくださった周囲の方々に感謝の気持ちをお伝えしたいです。



大澤侑子（ピアノ）

アウトリーチは他の授業と違い、グループで一つのことを成し遂げるため、プログラミングや人間関係など様々な困難もありましたが、その分、最後に成功した時の喜びはかけがえのないものとなりました。グレゴリー先生のワークショップや東京研修旅行などから、音楽を色々な角度から見ることができました。音楽の新たな一面を皆さんも是非、覗いてみて下さい♪



友田麻依加（ピアノ）

アウトリーチを履修してわかったことは、共演者一人一人の生活を尊重して作りあげることの重要性です。誰もがいつも同じ時間を過ごしている訳ではなく、温度差もあり、感じ方や気付き点、すべてが人それぞれだからこそおもしろいと感じるようになりました。社会に出て音楽家となる前に是非、学生の内にアウトリーチを履修して、音楽家となるための視野を広げてほしいと思います。

お知らせ

2009年4月1日（水）より
アウトリーチ・センターの開室時間が
下記の通り変更になりますので
よろしくお願ひいたします。

3月31日（火）まで 8時50分～16時50分
↓
4月1日（水）から 10時～15時

2008 年度の実習歴

- 4月3日 (木) スペシャル・コンサート事前企画「子どもの詩コンクール」(～4/24・木)
6月6日 (金) 仲道郁代講演会「ベートーヴェンとイメージ」およびディスカッション
7月5日 (土) 子どものための七夕コンサート ～きらきら輝く音楽との出会い～
(シリーズ第21回 於：神戸女学院講堂)
7月22日 (火) ギルドホール音楽院ワークショップ (～7/25・金)
7月26日 (土) 第2回「音で遊ぼう！～子どものための音楽作りワークショップ～」
9月4日 (木) 神戸市立医療センター中央市民病院アウトリーチ
9月11日 (木) 西宮市立夙川幼稚園アウトリーチ
9月18日 (木) 甲東デイサービスセンターアウトリーチ
10月31日 (金) 学校法人高羽幼稚園アウトリーチ
11月22日 (土) 子どものためのスペシャル・コンサート ～すてきだね、日本語の歌！～
(シリーズ第22回 於：神戸新聞松方ホール)
11月23日 (日) 「音楽の新しい学び」フォーラム 社会に飛び出す音大生たち
(於：東京音楽大学)
11月24日 (月) 子どものためのスペシャル・コンサート ～すてきだね、日本語の歌！～
(シリーズ第23回 於：東京文化会館小ホール)
12月13日 (土) 子どものためのクリスマス・コンサート ～みんなで歌おう♪クリスマス・ソング！～
(シリーズ第24回 於：神戸女学院講堂)
12月16日 (火) 学校法人雲雀丘学園小学校アウトリーチ
1月29日 (木) 神戸市立医療センター中央市民病院アウトリーチ
1月31日 (土) 若松町自治体青少年部(大社小学校)アウトリーチ
2月4日 (水) 国立病院機構兵庫中央病院アウトリーチ
2月26日 (木) 国立病院機構刀根山病院アウトリーチ



音楽をお届けします！！

「アウトリーチ」とは、「一歩踏み出すこと」「手をさしのべること」。

大学やホールといった従来の枠にとらわれずに、社会のさまざまな場にすてきな音楽のプログラムをお届けします。

♪幼稚園・小中学校へ：総合的学習支援プログラムとして、
♪病院や美術館へ：催しの趣旨に沿った手作りの
音楽子どものための楽しい体験学習を！
プログラムを、心をこめてお届けします。

お問い合わせは…

神戸女学院大学音楽学部 アウトリーチ・センター

〒662-8505 西宮市岡田山 4-1 TEL&FAX : 0798-51-8584

E-mail : outreach@mail.kobe-c.ac.jp http://www.kobe-c.ac.jp/musicdp/outreach/

編集後記

みなさまと共に駆け抜けた2年間。これからのアウトリーチもどうぞよろしくお願い致します。(井本)

3年半を締めくくる通信となりました♪これからも実り多い活動ができますように。(寺澤)

GP最終年度、たくさんの行事を無事終えることが出来ました。皆さんに感謝!(三上)

今年度も無事に終わりを迎えました。ありがとうございました。(南)

センター設立が昨日の日のことようです。充実の3年半をありがとうございました。(中村)

国の補助金を生かす責任とむずかしさをひしひしと感じ続けた3年半でした。歴代のスタッフに感謝!(津上)